侯に關する記事の根據を求め、これを前漢書のこゝに引いた記事と對照するものは誰でも此の如く考へねばならぬであらうと思ふ。然るにデ・ホロート氏によつて正しく前漢書のこの記事を解したマルクヴァルト氏②でも、また後漢書の西域傳を飜譯し、特にこの五翎侯の記事については前漢書の記載と對比を試みたシャヴンヌ氏③でも、少しもこの點について疑問を挾んでゐないのは、前にもいふた通り寧ろ不審に思はれる。思ふにこれは大夏及び大月氏に關する三史の記事について、充分に本文の批判を試みず、その總べてを正しいものと妄信し、また五翎侯は大月氏の建てたものであるといふ從來から行はれて居る考も先入主になつて、前漢書には單に大夏に「有五翎侯」と記し、また「皆屬ニ大月氏一」と記してあつて、大月氏が建てたことは少しも書いてないのに拘はらず、後漢書に月氏が大夏に遷つて來て、「分ニ其國一爲ニ……五部翎侯一」とあるのに據つた結果に外ならぬであらう。一體先きに引いた後漢書の記事は、勿論史記や前漢書の文句を取入れて書かれたものであり、而して前漢書に記された時代以後新たに起つた事件として、丘就卻に關すること以下を附加したに外ならぬのであるが、この史記や前漢書に據つて書かれたと思はれる部分に於てかゝる重要な相違の存するのは、後漢書の著者が偶然前漢書の記事を誤解したが爲に生じたものと見るの外はない。要するに所謂五翎侯を月氏種族の建てたものと見るべき理由は無く、月氏の征服した大夏卽ちトクハリの國に於て、月氏に征服せられるより以前からこれ等の翎侯が存し、後にその中の貴霜翎侯の勢力が增大して貴霜王家を建てることになつたものと見なければならぬ。卽ち繰り返していふが貴霜王家は月氏種族ではなく、大夏種族の建てたものと解しなければならぬ筈である。尤もこの五翎侯の領した地は大夏の領域全部に亙つて居るのではなく、たゞ葱嶺を西に下るワカンの谷間から大夏の都に達する孔道に當つて居つた地方に過ぎず、